

[活動年度] 2010 年度 - 2012 年度

## 日本語 OPI 研究会からの発信と連携強化

西川 寛之 (2010-2011 会長)

### 1. 2010 年から 2 年の活動

2010 年と 2011 年度 (2012 年 3 月まで) の活動では「発信」と「連携強化」が中心でした。定例会 6 回 (第 73 回から第 78 回) の他、これまでの流れを受けた 2 つの活動と、2 つの国際シンポジウムの共催、運営に関しては、運営員の任期に関する規定の修正、運営員の負担軽減として運営委員への交通費補助などを実施しました。箇条書きで書きだすと次のようになります。

#### 2010 年度と 2011 年度の活動一覧

##### 定例の活動

定例会の継続的開催とニュースレターの発行 (第 73 回から第 78 回)  
(研究発表・活用事例・実践報告)

##### 発信の活動

『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書

##### OPI テスト準備委員会

(日本語 OPI パイロットテスト実施後の検証・報告)  
(テスター養成・研修およびテスター活動状況の共有)  
(ACTFL との連携状況の確認・情報共有)  
(日本語 OPI の普及・活用に関する情報交換)

##### 連携の活動

国際 OPI シンポジウムの共催 (第 7 回、第 8 回)

##### 日本語 OPI 研究会の運営

(任期の規定の整理、運営委員会開催時の運営員の交通費支給)

以下、発信の活動と連携の活動、連携の活動、日本語 OPI 研究会の運営について行った取り組みについてまとめます。

### 2. 発信の活動

「発信」は、20 周年記念「報告書・論集」作成と「OPI の日」(団体試験の試行) の 2 つです。これらは前年度までの活動を引き継いだものです。

## 2.1 『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』

『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』を発行しました。発行に際し中心にご尽力された編集委員は以下の方々です。

金庭久美子さん、西部由佳さん、萩原孝恵さん、水上由美さん（50 音順）

アドバイザー：奥村 圭子さん

掲載論文等については公募形式で、投稿予定者締め切り 2009 年 12 月 31 日（原稿提出締め切り 2010 年 2 月 15 日）として原稿を募り、2010 年度に発行しました。

研究会の変遷をまとめた貴重なものとなりました。

## 2.2 OPI テスト準備委員会

定例会やニュースレターを通して、前年度に実施された「OPI の日」の結果の報告と情報共有が行われました。「OPI の日」については、今振り返れば「日本語教育の参照枠」が作られる過程に OPI が貢献できる機会があった企画でした。2010 年度は「OPI の日」実施後、その先へ向けた活動が始動した時期です。

OPI の日は、第 62 回定例会報告（2006 年 12 月 24 日）に西川から日本語 OPI プロジェクトとして提案したものでした。総会を経て、プロジェクトよりも大規模な活動を可能にするため委員会を立ち上げて実施することとなりました。その委員会は埴誠一郎委員長の下、『OPI の日』設置検討委員会として、第 65 回定例会（2007 年 11 月 10 日）において承認され、活動を開始しました。そして、2009 年 7 月 26 日、辻和子さんの働きかけのおかげでヒューマンアカデミー日本語学校東京校を会場として「OPI の日」（OPI の団体受験の試行）が実現しました。受験手数料は一人当たり 1,500 円、正式な認定書発行 4,500 円で試験を開催することができました。

「OPI の日」を受けて、今後について ACTFL などとの連絡・交渉や今後の活動の検討を、『OPI の日』設置検討委員会を「OPI テスト準備委員会」と変更し、活動が継続されました。（なお、この委員会は 2024 年度まで活動を継続し、2024 年 7 月に発展的に解散することが報告されました。これは「日本語教育の参照枠」について 2019 年（令和元年）から審議が始まり、2020 年 11 月に「一次報告」、2021 年 3 月に「二次報告」が出され、同年 10 月に最終報告として完成した社会の動きに合わせて研究会が活動していることの表れでもあります。）

## 3. 連携について

2010 年度および 2011 年度において、日本語 OPI 研究会は、国内外の関連団体と連携し、国際シンポジウムの共催を通じた研究交流活動を行いました。

### 3.1 日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム

2010年7月16日から18日、函館市において開催された、(財)北海道国際交流センター日本語日本文化講座夏期セミナー25周年記念・日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウムに、日本語OPI研究会は共催団体として参画しました。本シンポジウムは、(財)北海道国際交流センターおよび日本語プロフィシエンシー研究会を中心に企画・開催されたものであり、「生活日本語とプロフィシエンシー」をテーマとして、生活場面における日本語運用能力の捉え方や評価のあり方について、研究者・教育実践者による活発な議論が行われました。

### 3.2 第8回国際OPIシンポジウム

2011年8月6日・7日に米国オレゴン州ポートランドにおいて開催された「第8回国際OPIシンポジウム」においても、日本語OPI研究会は共催団体の一つとして参加しました。本シンポジウムは、各OPI研究会、日本語プロフィシエンシー研究会、ポートランド州立大学世界言語・文学部、および同大学日本研究センターの共催により実施され、会場はポートランド州立大学(米国オレゴン州)でした。テーマは「OPIとオーセンティシティー—オーセンティシティーとプロフィシエンシーに基づく日本語教育のあり方—」で、OPIにおける発話の真正性や、プロフィシエンシー概念に基づく日本語教育・評価の理論と実践について、国際的な視点から議論が行われました。これら二つの国際シンポジウムへの共催参加は、日本語OPI研究会が、(財)北海道国際交流センター、日本語プロフィシエンシー研究会、各国のOPI研究会、ならびに海外大学組織と連携しながら、日本語OPIおよびプロフィシエンシー研究を国内外に発信し、研究交流を深化させてきたことを示す重要な活動実績として位置づけられます。

## 4. 日本語OPI研究会の運営

日本語OPI研究会の運営について、運営委員の募集がうまく進まないことが続いていたことから、2年と定められていた任期を確認したうえで1年の延長を認めるよう会則を変更、さらに、有志の運営員ということであっても運営員会への出席に伴う交通費は会費から支払うこととして、予算案に費目として計上しました。運営員のなり手が少ない問題は今も続いています。

## 5. さいごに

個人的な考えではありますが、OPIが実用化されている数少ない口頭表現能力を測る試験として活用され、その広がりの方に研究や教育への応用を後押しする研究会としての発展があるものと信じています。